

3

連載エッセイ

## 「ピケティの衝撃」と 「ヴァールの癒し」



小橋 澄治

こばし すみじ

京都大学 名誉教授

ト マ・ピケティの「21世紀の資本」の翻訳本が去年の暮れに出版された。NHKの「白熱教室」でも何回か放映されたし、多くの本屋にはピケティのコーナーがあり、解説本が氾濫している。経済書はお呼びでないかと敬遠してきたのに、騒ぎの大きさへの好奇心から、分厚い本書を購入してしまった。読み終わるのに1年以上かかるのではとか、途中放棄とかを覚悟したが、読み始めると結構集中でき、1カ月ほどで終わった。(但しその間、お絵かき仕事はかなり停滞した。)

独断的な読後感は「暗く、衝撃的」である。資本主義社会が成熟してくる19世紀末から所得格差はずっと増大し続け、2つの世界大戦で富が大消費された時代に大幅に所得格差

が減少(皆、貧乏になった)したが、1970年以降、再び格差は増大し続けているという。要するに資本主義が成熟するほど必然的に所得格差は増大していくという衝撃的な御宣託である。

**遠**い昔、学生時代には左翼的思想にかぶれて(当時の学生の多くがそうだった)、理解できるはずもないマルクス・エンゲルスの本を読んだことにしていた60年前の私なら、それはその通りと平然としているかも。その後のわが国は高度経済成長の道を驀進し、就職した私はいつの間にか、マルクス・エンゲルスも忘れて(元々、身につけていない知識だから当然である)、資本主義社会にどっぷり漬かって暮らしてきた。勿論、昨今の日本で大問題になっている深刻な所得格差について十分承知はしていても、それが資本主義の本質と結びつくとは思っていない。

**資**本主義社会が始まる前は、絶対王政時代、中世封建時代、古代奴隷社会と遡っても、ずっと大変な身分社会であり、所得格差は今よりずっと大きく、固定的であったと教えられている。現代資本主義の時代になって、少なくともタテマエとしては、人類皆平等であり、階層があっても流動的で個人の努力次第で地位も富も向上するはずである、と思っていた。ピケティさんによりその幻想は打ち砕かれた。だとすると人類は有史以来、いつの時代も階層を作り、所得格差が生じていたわけで、大規模な戦争や大災害で社会の富の総量(及び人間の数が)が大幅に失われた時にのみ、格差は縮小し、平和になると再び格差を増大させてきたということだろう。

**私**は1934年生まれだから、成長期は大戦によって日本のみならず、世界中の富は大幅に縮小し、

既往の社会階層は崩壊し、皆貧乏だった(という実感はある)時代に当たる。日本人は皆、中産階級といわれた時代がずっと続くと思っていた。それは私の生きた時代(まだ死んでいないが)が幸運にも、有史以来、まれなる所得格差が非常に少ない時代に当たっていたというだけのことであった。このことのほうが私にとっては衝撃である。

**勿**論、ピケティはこの問題の対策を提案しているし(それが実現するかは、心もとないが)、ピケティ学説への批判もあり、これから活発な議論があるだろう。もうじき死ぬべき老人が心配することはないと思っても、暗く重たい気分になる。

この本と同時に買ったフランス・ドゥ・ヴァールの「道徳性の起源」という本がある。この人は霊長類の社会的知能研究の第一人者だそうである。これを読んで私は何となく癒され、明るい気分になった。独断的に言えば、人間(に限らず、霊長類、哺乳類、爬虫類も含めて)の性善説を述べているように思う。

現在の人間が持つ道徳性の基本は、共感や思いやり、他者やコミュニティへの気遣いであり、それは社会的動物が集団生活を円滑に行い、生存・繁殖に役立てるために進化させてきたものだという。それは他の社会的動物と同様に、人間が進化の過程で必然的に育まれたものであり、道徳性の源泉を宗教や近世の啓蒙主義などに求める必要はないという。

**勿**論、霊長類、哺乳類の行動にみられる「ケダモノのごとき」残虐性や頻繁に行われる闘争を否定するのでないが、その陰に隠された「他者への共感・思いやり」を豊富な実例で示され、それぞれが大変面白い。霊長類の一種、「ボノボ」は人類に大変近い種らしいが、その社会は平

和で仲間への思いやりに満ちている。彼らはコミュニティ内のもめごとを避け、和を保つ手段として、仲間相互で頻繁にセックスを行う。レスもホモも含まれる(この種の話はご婦人方のヒンシュクを買い、私の評判が悪くなるだけなので止める)。

この原著の表題に「The Bonobo and the Atheist.」(ボノボと無神論者)とあり、この辺の議論は東洋人の私にはよく理解できないが、現代の西欧人の宗教(キリスト教)への深いこだわりがうかがえる。道徳性の源泉は宗教ではないと宣言しつつ、宗教を排除することは否定する。神が不在になったら、何でその空白を埋めるのか? 科学では無理だという。著者はそれはヒューマニズム(訳者の解説では人文主義)だというが。

**ヴ**ァールさんはオランダのデン・ボスの出身だそうで、そこは15世紀の画家ヒエロニムス・ボスのゆかりの土地である。ボスは「おどろおどろしき」絵が好きな私にとって大変気になる画家であるが、本書の冒頭ページにボスの「快樂の園」が掲載されており、彼の並々ならぬボスへの関心がうかがえる。本文にも随所にボス論が展開される。

**ボ**スの快樂の園や地獄図のおどろおどろきに大変興味を惹かれてきたが、それらの絵の意味について、ボス本人は何も言っていないし、後世いろいろな解釈があるが、私には十分には納得しがたかった。この本では快樂の園で、快樂に耽り、どんちゃん騒ぎをしているのは無知蒙昧(ムチモウマイ)なる農民達である。彼らは苦難に満ちた日常の労働生活のつかの間の息抜きとして、ひとときの快樂に耽っているのであり、それはそれでよいのではないか(来世に地獄に落ちるとしても)。一方、地獄図で苦しんでいる人物達は、現世で農民

達に君臨・支配し、うまい汁を吸ってきた教会の司祭・修道士などであり、彼らが来世で徹底的に罰せられるという解釈らしく、当時の支配層への痛烈な批判である。

**わ**が国にも極楽と地獄の話があるが、極楽の話はごくさらくとしていてどうでもよいようだ。地獄については執拗に詳しい話が多い。残酷な手段で亡者は責めぬかれ、死ぬことはなく永劫に苦しめられる。その執拗さを不思議に思っていたが、現世で苦しい労働・抑圧で一生虐げら

れ続けた人々が、恨みに思う人間への復讐の念の深さを示しているのだ、という解釈に(何という本だったか思い出せない)なんとなく納得した。

**今**回は「読書の楽しみ」をテーマにと思ったが、話が地獄に落ちてしまって、オシマイである。

(ここに添えるべき絵はボスの地獄であるべきだが、力不足でまだ未完成であり、代わりとして樹木に隠された不気味な(と私は思う)ある局面とする。)



(絵:著者)